

「ディパックスのサイトに入って考えたこと、感じたこと」

認知症患者の家族の語り—ヘルストークオンライン—

母に早期の認知障害があり、今、私が最も関心を持っている病いは認知症なので、英国 DIPEX の「ヘルストークオンライン」で、認知症患者を介護する家族の語りを視聴しました。(以前にもヘルストークオンラインのウェブサイトを観きましたが、まだ認知症についての語りに向き合う勇気がなかったように思います。)

最初に選んだのは、母と年齢の近い、65歳で認知症を診断された女性の息子さんの語り。次に、認知症が14年かけてゆっくりと進行していった男性の息子さんの語り。それから、「疑念—認知症の初期徴候」のトピックの中から、何かがおかしいと自ら気づいていた女性の夫の語り、初期症状が抑うつ症状に間違われた男性の妻の語り。さらには、「症状緩和」と「戦略—介護家族からのヒント」の各トピックを観きました。

私にとって聞きたい「語り」は、やはり母や自分の状況に近い経験をした人のものでした。認知症初期の人の、記憶に空白が積み重なっていく不安。そして、自分が失われていく不安と焦り、苛立ち。家族だけで勝手に物事を決めて、自分を除け者にするという怒り。一方で、本人に相談し、その意向に沿って行動しているのに、突然、怒りをぶつけられた家族の戸惑いや悲しみ……。

家族の語りを聞いて分かったこと

ウェブサイトの中で語っている人たちと私が似たような経験を共有しているからといって、すぐさま癒されたり励まされたりするほど、母の病いに対する私の気持ちは生易しいものではありませんでした。ただ、大切な家族の病いに傷つきながらも向き合ってきた人たちの語りは、その病いについて、そして家族としての寄り添い方について、少し私を納得させてくれたような気がします。「ああ、やっぱりそうなんだ」と再確認できたことが、間接的に癒しになると言えそうです。

特に印象深かったのは、ある男性の、子として親にすべきと思うことと、そのためにかかる費用、費用の負担能力、費用を負担することによる自分の生活への影響について、葛藤があるという語りでした。自分が犠牲になっているという感覚との闘い、自分と親のどちらを優先するか、自身のモラルが試されている、と語っています。老親の介護を、人としての自分の根本に関わる倫理観や哲学の問題として認識し、自身に問い続けるこの人の尊さに、私は感動しました(この点では、私はまだ当事者ではないので、感想が生易しいのだと思います)。

別府宏圀先生は、病いの経験やその研究を通して、私たちは人間のありかたについて何かを教えられ、と話されました。上記の男性も、家族として「患うことや、能力低下や、つらい喪失や、死の脅威といったものが生み出す差し迫った人生の状況」を経験しながら、生きて死にゆく人間としての大切な何かを得る、その途上にあるのかもしれないと思いました。そうだとすれば、親の病いや老いも、自分の老いや死を経験することにも、尊い意味があり、耐える価値があるのだという希望の光が示されたように思いました。

(筆者のご希望で匿名にさせていただきました)